

授業時 子供の立場に立った板書をする

中学校の社会科の選択授業の一場面である。

G教諭：「今日は、オランダについて学びます。オランダというと、
どんなことを思い起こす？連想クイズでいこう。誰からでもいいよ。はい、どうぞ。」

Hさん：「風車。」

G教諭：「風車。うん、風車か、風車って、こんな感じだよね。」

Iさん：「園芸農業。」

G教諭：「オランダの園芸農業、突然難しい言葉が出てきたね。」

Jさん：「チューリップ。」

G教諭：「そうそう、オランダの花っていえばチューリップだ。」

Kさん：「運河。」

G教諭：「運河ね。そうだな。」

5分間ほど活発な発言
が続き、G教諭はそれら
をすべて黒板に
書き上げた。

その後授業を
展開していく中
で、G教諭は生
徒の発言を織り
込んで説明をし、
それを黒板に整
理した。



事例では授業の導入で、子供たちにオランダに関して連想することを発表させ、それをすべて板書することで動機付けを行っています。

子供の発言を生かして板書をする

子供は自分や他人の発言・応答が板書されることによって、それを客観視することができ、視覚でとらえたものを基に、もう一度自分の考えを整理することができます。これは自己理解に通じるとともに、他人の考えや気持ちを理解する手がかりにもなるものです。

また、自分の発言が板書され、それが授業の中で生かされていくと、自己有用感を味わいます。

一人一人の発言の意図をくみ取って板書し、それを生かしながら授業を展開する工夫や配慮が必要です。

授業の展開が見える板書計画をたてる

何を板書するか、どのように板書するかを考えることは、授業全体の構造を考えることになります。ねらいにそってどのような授業を展開するかを考え、授業の展開が見える板書計画を立てておく必要があります。

しかし、「黒板の漢字や、言葉の意味が難しすぎる。」「まだ黒板を写していたのに、さっさと消されてしまった。」など、板書に関する子供のつぶやきも聞こえてきます。板書計画を立て、それに即して進めることも大切ですが、子供の立場に立ち、子供の表情・反応を見ながら板書を構成していく姿勢をなくしてはいけません。

教師の板書計画と授業中の子供の発言を織り交ぜて、教師と子供の協同作品として「板書」を作り上げていくことは、子供にとって魅力ある授業の創造につながります。